



## 世界からの下降 : ハイデガーにおける共同性

著者	五十嵐 沙千子
雑誌名	哲学・思想論集
巻	43
ページ	138(39)-124(53)
発行年	2018-03-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00151164">http://hdl.handle.net/2241/00151164</a>

## 世界からの下降

——ハイデガーにおける共同性——

五十嵐 沙千子

われわれが人と共にあるというのはいかなることなのか。

われわれは人と共にあるとき、われわれは真に人と共にあるのか。

ハイデガーが人と共にあるというあり方を拒絶しており、彼は彼の思想に「他者」を容れる余地を持たない、というよくある批判がこれまでレヴィナスやレーヴィットを始めとして多く寄せられてきたことは周知の通りである。

本論文はハイデガーにおける「共同性」あるいは「ハイデガーにおける共同性」を問い直すものである。

はたしてハイデガーに他者は不在なのか。

真に人と共にあるというのはいかなることなのか。

### 1 ハイデガーの公共性

ごく普通に言ってハイデガーがいわゆる「公共性」をダンピングしたことはその通りである。彼にとって「公共性」というものは「その辺にいる誰でもがまことしやかに語っている、だが自分では本当は何の実感も持ちえていない単なる常識」でしかない。この通俗的な「みんなの常識」こそ「公共性」とハイデガーが呼ぶもの、「公共性」として社会を支配する権力である。「世界はこうである」とひとが言うから私も「世界はこうである」と思い、「人間とはこうである」とひとが言うから私もそう言うのである。ここは日本であるとひとが言うから私はここが日本であると思ひ、われわれは日本人だとひとが言うから私もわれわれは日本人であると思うのだ。そこに私の実感があるわけではない。だが差しあたり私は世界を言明するひとの言葉に従っている。反抗する理由が私にはないのだ。というより世界を言明する別の言葉を私は与えられていない / 持っていないのである。現に世界はそう言い、それに従って行動するひと達によって営まれている / 動いている。それを疑うことがどうして私にできるだろう？ その常識のうちに私は置かれ、その常識を真実として私は育ってきたのだ。「現存在は差しあたってたいいは世人のうちに没入しており、世人によって支配されている」(SZ 167)。私は「まさしく差しあたって世人の公共性のうちへと被投されている」(SZ 167) のである。こうして私はひとが語る常識に、そしてその常識を語るひとたちに同化し / 支配されるまま「世人の公共性のうちへと喪失されている」(SZ 175)。だが私が「世人の公共性のうちへと喪失されている」としてもこの喪失のおかげで、あるいは「この公共性がすべての世界解釈と現存在解釈を差しあたって規制している」(SZ 127) としても規制を受け入れるこの私の受動性のおかげで、「公共性 = 常識」を持つ世人として私はこれまでここで生きてこられたのである。

ここが私の世界のすべてなのである。  
ここが私の住んでいる / 私に見えている世界のすべてなのである。  
私には、ここから出て行くことはできない。それは不可能である。  
なぜなら外は「無い」からである。  
こうして私はここに、そしてここに共にいるひとたちにしがみついている。

だが、こうして私がひとにしがみついているというのは、私とそのひとたちと「共にある」ということなのか？

もちろんそうではない。

ではそのひとたちは誰かと共にあるのか？

やはりそうではない。

ひとはいたるところに共にいる = 居合わせてはいる。たとえ現実的に目の前にいるという仕方ではないとしても、私に世界を与え、この世界とともに構成し、おたがいに規制し合っているというかたちで、たとえば「ひとの目にどう映るか」「普通こうだろう」「みんなそうしている」というかたちで、ひとはどこにでも居合わせている。むしろ私はひとと共にいないということができないほどである。一人でいる時でさえ私はひとを忘れることはできない。「共存在 (Mit-sein) は、なんらかの他者というものが現実的に見あたらず、知覚されていないときでも、実存論的に現存在を規定しているのである」(SZ 120)。絶えずひとがどうするか、ひとがどうあるかということ私に常に気にし、それに従って自らのあり方を決定している。あるいはより根源的に言えばそもそも道具を使うという人間の生活の根本条件が私のあり方をひとに従わせるのだともいえる。リアルに私は、毎日の生活を生きていくためにひとの道具をひとに倣って使わなければならない。ひとが作ったこの世界で生活する上で、ひとが作った道具をひとと同じように使えないことは端的に生物としての私の死に直結する。「時間」にせよ「電車」にせよ「箸」にせよ「信号」にせよ私はひとのする通りに道具に合わせて生きている。そこからはみ出ること、違うあり方をし、ひとの外に出ることはこの世界での生存を放棄することに他ならない。ひとと共にいる (Mit-sein) というのはどこまでも私の存在の絶対的・根本的な条件なのである<sup>1</sup>。

だがそれは、私がひとと本当に共にいるということではない。ひとである一般的な在り方の中に自分を嵌め込み、他人を絶えず気にし続け、ひとの中に紛れていけば無難に生きていくことはできるだろう。だがそれは私がひとであることである。それは私が私を消去し、この私であることを放棄することである。そしてもし、すべての現存在がひとであり、私を放棄するとしたら、「共にいる」ことは不可能である。私がないからだけではない。「共にいる」誰も世界の中にいないからである。

だとすればハイデガーに「他者がいない」のではない。「他者しかいない」のだ。すべての現存在である私は常にひととして、私ではないものとして、他者たちの一人として / 他者として共に不断にこの世界を維持し、そして不断に自己を決定 = 喪失している。私が他者だったのである。

ハイデガーは言う。

誰もが他者であり、誰ひとりとしておのれ自身ではない。世人でもって日常的な現存

在は誰であるのかという問いが解答されたのだが、そうした世人は、誰でもない者であり、この誰でもない者にすべての現存在は、互いに混入し合って存在しているときには、そのつとすでにおのれを引き渡してしまっているのである。……こうした諸様態をとって存在するとき、おのれに固有な現存在の自己も、他者の自己も、まだおのれを見いだしてはおらず、もしくはおのれを喪失してしまっている。ひとは、不斷の非自立性や非本来性という仕方において存在しているのである。(SZ 128)

誰でもない他者たち = 世人が沈黙のうちで構成し共有し規制し合う公共的世界のなかに私はある。そこに紛れて私は生き延びている。

差しあたって現存在は世人であり、たいてい世人であるにとどまる。したがって、もしも現存在が世界をことさらに暴露しておのれに近づけるときには、つまり、現存在がおのれ自身におのれの本来的な存在を開示するときには、「世界」のこうした暴露と、現存在のこうした開示とは、現存在がおのれをおのれ自身に対して直面している隠蔽や不明確化の撤去として、またそうした偽装の破碎として、つねに遂行されるのである。(SZ 129、傍点引用者)

私はまず世人でありそしてたいてい世人であるに留まるとハイデガーは言う。世人に自己喪失したまま、自分にとって他者であるまま、他者たちの間のひとりの他者であるまま、たいていの私は生を終わるのだろう。だが、「もしも」とハイデガーは言うのだ。「もしも現存在が世界をことさらに暴露しておのれに近づけるときには、つまり、現存在がおのれ自身におのれの本来的な存在を開示するときには」、自己喪失した私にも、この「おのれの本来的存在」の可能性が生まれるのだ、と。それは私が「世界」と自らの喪失された在り方を暴露するときである / それは私が「世界」と自らの喪失された在り方を、その喪失された在り方において示すときである。もちろんそこにおいて与えられるのは、「本来的自己」なる言葉で示される何か具体的な実体、「本来的自己」というどこか上方にある輝かしい姿ではない。そこにおいて示されるのはただ、私である現存在がいつでも占領されてしまっているということ、私がいつでも自分を喪失しているということだけである。だが、私が占領されているというこの受動態は、まさにこの受動態の主語を、つまり「占領されたもの」「喪失されたもの」という欠如的な仕方<sup>ネガティブ</sup>で私を指差すのだ。ハイデガーがいう「本来的自己」とはこの指差された私、占領され失われた「私」である。だとすれば「本来的存在の開示」とは私であるこの占領された場所を占領された場所として照らすことであり、本来的自己の実現とは、私が何か新しいもの、「本来の私」に「なる」ことではなく、単にこの占領を外すこと、喪失 = 頽落を取り戻すこととなる。それは占領を覆すことがいつでもそうであるように「撤去」であり「破碎」である。だがこの「破碎」は、受動態に縛られている私がこの私の受動態にしがみつきの続けるかぎり目を背け続け、そして目を背け続ける限り背負い続けることになる私自身の責めなのである。

ここにすでにハイデガーの基本的な構図がある。つまりわれわれは「この社会で生きる」ために自らである可能性を棄てて自己限定的に生きている自己放棄した存在である / そし

てまさにこの地点においてわれわれは自己限定を外し全面的に自己を取り戻しあらゆる私を生きる可能性を持つのである。

それは私の私に対する責任である。世界の中で生き延びるために私自身を捨てた私の私に対する責任である。なぜならそれは私の場所だからである。

問題はいかにしてこの「破碎」を実現するかということである。

## 2 ハイデガーの「共同性」

この回復、取り戻しの可能性はハイデガーにおいてはある眼差し、ある声を通して自己に届けられる。私はどこにしようと思合せるひとに没入し、ひとの支配に自己を疎外しているのであるが、同時にその疎外の中で、疎外されたものが絶えず沈黙したまま疎外した私を眼差すのである、というふうに。それは絶えず私を眼差すのだ。私が生き延びることは私を損なうことでしかない、そして損なわれたものは回復されなければならないのだ、と。

こう私に絶えず呼びかける沈黙の声をハイデガーは「友の声」と呼ぶ。声はその責が私にあると呼ぶ。そして私を「責めある存在へと呼び覚ます」(SZ 290)<sup>2</sup>。声は絶えず私につきまとう。いかなるときもこの友の声は自らの傍らにある。しかし私はたいていそれを隠蔽する。生き延びることを求める私は差しあたり「破碎」を避け、破碎を求める友の声を避け、世人の騒々しい空談に逃げようとするからである。私はこの声を聴きたくないのだ。しかもこの声、つまり「良心は、ただ沈黙しつつ呼ぶだけなのである」(SZ 296)。

ハイデガーはしかし、もうひとつの友の在り方を示している。それは私が自らのうちに携える良心と同じく私に破碎を促し私に本来的存在の可能性を開くもの、だが私が自らのうちに隠蔽しうる沈黙の友 = 良心ではなく、私に現前する生ける友である。

この友とは誰か？

それは「決意した現存在」である。

「決意した現存在は他者たちの「良心」となることがありうる」(SZ 298)とハイデガーは言う。「決意性」とハイデガーが言うのは「最も固有な責めある存在をめぐって、沈黙したまま不安への用意をととのえておのれを企投すること」(SZ 297)である。すなわち自らの良心の声に自分を開き、ひとに合わせた迎合的・同一化的な在り方ではない在り方へ、破碎へと赴く私 = 「決意した現存在」が、他者たちにとっての「良心となる」とハイデガーは言うのだ。もちろん私は他者たちのために自己の破碎を行ったのではない。私は自らが携える「友の声」に導かれて本来的な在り方へ、暴露と破碎へと出て行ったのである。だが、その私の在り方が、共存在する他者を共振させ、彼らを彼ら自身の最も固有な本来的な在り方へと解放する。「決意した現存在」は「共存在しつつある他者たちを、彼らの最も固有な存在しうることにおいて「存在」させ、この彼らの存在しうることを、手本を示し解放する顧慮的な気遣いのうちで共に開示する」(SZ 298、傍点引用者)のである。

この共振、この共なる道行きをハイデガーは「本来的連携」(SZ 122)と呼ぶ。「こうした本来的連携が、それぞれの他者を解放して彼自身に向かって自由にするという正しい即

事性を初めて可能ならしめる」(SZ 122) からである。

私は「彼の友」ではない。

私はひとりで私の本来的自己へと向かう。私は彼を助け、彼のために手を差し伸べるのではない。私は「本来的存在」を開示する破碎と暴露の中に自らの身を置くのである。私は彼の友ではなく、「私の内なる友」の声にのみ従う者である。だがその私の在り方、私が存在しうるといふ私の前傾が、彼を彼の本来的自己に向かわせる。そしてその私の前傾が同時に、共存在する他者を解放するのである。

私は彼の友ではない。しかし私の彼へのベクトルは存在する。これを「手本を示し解放する顧慮的な気遣い」とハイデガーは呼ぶ。そしてこの「決意性の本来的な自己存在のうちから、本来的な相互共存在がはじめて発現する」(SZ 298、傍点引用者)と彼は言うのだ。

この「手本を示し解放する顧慮的な気遣い」とは何か？

そもそも顧慮的な気遣いとは人が人に向ける配慮、差し伸べる手のことである。だがハイデガーにおいて人と人との関係の中で差し伸べられるこの顧慮は、全く異なる二つの位相において描かれる。ひとつは本来的連携における顧慮であり、もうひとつは世人の顧慮である。

われわれが日常目にする顧慮はもちろん、以下のような世人の顧慮である。

顧慮的な気遣いは特定の他者から「気遣い」をいわば奪取して、その他者に代わって配慮的な気遣いのうちに身を置き、その他者のために尽力することがある。こうした顧慮的な気遣いは、配慮的に気遣われるべき当のことをその他者に代わって引き受けるのである。その他者はそのさいおのれの場面から追い出され、身を退くことによって、その結果、配慮的に気遣われたものを、意のままになるように仕上げられたものとして後で受け取ることになるか、ないしは配慮的に気遣われたものから全く免れてしまう。そうした顧慮的な気遣いにおいては、依存的で支配を受ける人になることがありうる。(SZ 122)

世人は他者の「世話」をし、気持ちを「聞いて」やり、「気を遣って」やり、「アドヴァイス」をし、「教えて」やり、「正解」を与えてやり、「構って」やり、手ごろな承認を与えて不安を「満たして」やり、進むべきルートを設定してやり、そのルートに従うよう誉めたり叱ったりして他者を支配する。そうした行為のすべては他者を世人に / この世界に繋ぎ止め、この世界の居場所を与えてやる顧慮である。もちろん彼らはその相手の「ため」に善かれと思って顧慮するのである。それは相手が彼らにとって責任を持たなければならない相手だから、自分の生徒・仲間・家族・部下・子供・患者・友だからである。相手が自分にとってどうでもいい相手ではないからこそ、彼らはその相手のために心配し、世人である自分の怖れを相手に投影し、相手が考えるべき事柄を代わりに考えてやり、相手を世界への、つまり非本来的存在へのルールに囲い込むのである。彼らは目の前の他者を自分の「生徒」「家族」として所有し支配することに微塵の疑いも持たない。それどころか彼らは、現前する彼の他者を支配し、操作するこうした「介入」を、むしろ自分の責

任であるとさえ思っている。彼らはその彼の他者が世界-内で生きていけるようにするために尽力するのである。そしてその尽力の結果、彼の他者は、支配なしにひとりでは生きていけない世人になるのだ。

これに対して、特定の他者のために尽力するというよりは、その他者が実存的に存在しうるという在り方の点でその他者に手本を示すような、そうした顧慮的な気遣いの可能性が成り立つのだが、これは、その他者から「気遣い」を奪取してやるためではなく、その他者に「気遣い」を気遣いとしてまず本来的に返してやるためなのである。……そしてそのような顧慮的な気遣いは、その他者を助けて、その他者がおのれの気遣いのうちにあることを見通し、おのれの気遣いに向かって自由になるようにさせるのである。(SZ 122)

これがもうひとつの顧慮、つまり本来的連携における顧慮である。それは他者に彼の「気遣い」を本来的に返してやるという顧慮、「おのれの気遣いに向かって自由に」解放する顧慮だとされる<sup>3</sup>。

その他者に「気遣い」を気遣いとして返すというのはいかなることなのか。

その他者、しかし「その他者」は「特定の他者」ではない。

私は「彼の友」ではない。

私はひとりで私の本来的自己へと向かうのだ。

だが同時に、そこへ向かう私は共存する他者に「顧慮的な気遣い」を向けるのだという。そしてそれこそが本来的連携なのだと言デガールは言う。

だが誰に？ それは私の友なのか？

私を導いたのは私の友の声であった。

だが私の友は誰なのか？ だが私には友はいない。

私は誰に顧慮的な気遣いを「向ける」のだろうか。

### 3 刻印づけられた者

ハイデガールは 1950 年の “Die Sprache” において、次のように語っている。

言葉が語る (Die Sprache spricht.)。このことは、全くそのまま「言葉が語る (Die Sprache spricht.)」ということである。(GA12 17)

人間が言葉を使って何かを語るのではない。言葉が語る。言葉が人間を使って語るのである。「人間はただ、人間が言葉からの呼びかけに応じて、言葉のために言葉を語るように用いられているかぎりにおいてのみ人間なのである」(GA12 185、傍点引用者)。そうハイデガールは言う。人間が語っているように見えたとしても、そもそも人間が語ることができるのは人間が言葉を聴くことができるからであり、言葉を聴くことが人間が語ること

の前提である<sup>4</sup>。

言葉を語ることは同時に、聴くことでもある。……語るというのは、言の活動としてもともと聴くことなのである。聴くというのは、我々の用いている言葉を聴くことなのだ。だとすれば、語ることが同時に聴くことなのではなく、語るとはそれ以前にまず聴くことなのである。……我々は、言葉というものを語っているだけでなく、言葉に基づいて語っているのである。(GA12 243、傍点引用者)

「言葉を聴く」ことができるとしたらそれは言葉を聴くということ、言葉が語るのを聴くということである。言葉が語るのを聴き、それを受け取り、初めて人間は自らも「語る」ことができるのだ。その意味において人間の語りは言葉の語りを自らの身体においてリフレインすることである。「聞き耳を立てては受け取り、それを語り出すのが応答である」(GA12 30、傍点引用者)。まず言葉が語るのだ。人間ではないのだ。言葉が人間に先行するのだ。そして、その言葉の先行性を自らの身体において実現するかぎりにおいて人間は人間であることができるのである。

では人間が人間であるとはいかなることなのか。

言葉がすべてに先行するとしたら、やはりここでも「人間」という言葉が「人間」を産み、与え、存在 (es gibt) させているということになる<sup>5</sup>。われわれは「人間」という言葉に呼び出され、その呼び出しに応じて「人間」という言葉の枠組みに自らをはめ込み、自らを「人間」にしているのだ、というふうには。「人間」という言葉 = 枠組みが人間に先立つのであり、「人間」という言葉が、人間が存在する先行条件となっているのである。もちろんそれは「人間」だけではない。すべての事物が同様に言葉 = 名前に呼び出され、その名前に嵌め込まれ、その事物として現象している。事物は、同じその名の下に同じその事物として結集し、そのものとして現象し、名指されている間、そのものとして留まっているのである。その間、事物は、その事物を「している」。ハイデガーは言う。「このような結集させつつ留まらせることが、事物が事物としてある (Dingen der Dinge<sup>6</sup>) ことである<sup>7</sup>」(GA12 19)。一定の炭素がある一定の間「木」で「あり」、木が一定の間「机」で「あり」、人間はある一定の間 (例えば試合が終わるまで) 「サッカー選手」で「あり」、あるいは「子供」で「ある」。「木」であれ「机」であれ「子供」であれ、「名指して呼ぶことで、名指された事物は呼ばれることにより、事物としてあるようになってくる」(GA12 19)。すべての「在るもの」は言葉がその「在るもの」の同一の名の下に結集させ、そのものとして「在らせ」、現象させるものである。

存在する者がこの呼び出しに応えないことはできない / 存在する者はすべて、既に呼び出しに応じている。存在する者はすべて、既に呼び出しに応えたものとして存在しているのだ。われわれにできるのは名指される呼び出しに従うこと、むしろ自ら「聴きつつ区別の命令に応じうごとく身を整えていること」(GA12 29) でしかない。言葉がすべての「在るもの」を区別 = 分節化し、そのそれぞれの名の下に結集させ、存在させるのである。だとすればこの呼び出しの声を「聴くということ (das Hören) は自らを抑える聴従 (das Gehören)」(GA12 29) であり、「区別するという自体そのものに基づいてこの区別の中へと呼び入れられて、死すべき者の方が今度は語り出すときの仕方は：応答 (Entsprechen)



である。死すべき者の語りは、何よりも先に、区別の命令や指図に耳を傾けるものであつたはずである」(GA12 28-29、傍点引用者)。

こうして言葉に服従し、言葉が刻む分節化の枠組みを世界の枠組みとして世界に刻み、言葉が現出した存在者の地平にわれわれは住む。同時にわれわれはその分節化 = 区別の命令に呼び出され、ひとつの名を自らの枠組みとして自らに刻み、そのものとして存在するのである。それが私が私であるということである。その枠組みを守るかぎりにおいて私の同一性は保たれる / 私は存在する。私は常にひとつの同一性、ひとつの種族の私なのである。こうして初めて私は存在する / 存在を与えられる (es gibt) のだ。

だがこれは腐った種族である。

ハイデガーは言う。

我々のドイツ語では、同じような刻印のしるしを持ち、同じ刻印を受ける運命を担う人間のことを、種族・世代・男女の性別 (Geschlecht) と呼ぶ。この語は人類という意味の人間種族を意味するとともに、部族、氏族、家という意味のそれぞれの一族をも意味する。これらすべての意味が種族の二重性として刻印されているわけである。人間の「朽ち果てた姿」を見せる種族のことを、この詩人 (トゥラークル：引用者注) は「腐敗した種族」と呼んでいる。この種族は本質的な在り方から引き剥がされた (herausgesetzt) ものであり、それゆえに「恐怖に曝されている」 (entsetzt) 種族なのである。

この種族は何によってそういう刻印を押されたのか、すなわち何によって呪われているのだろうか。呪いとはギリシア語ではプレーゲー、ドイツ語では [打つ、撲る、刻印を捺すと同語の] 「呪い」 (Schlag) である。朽ち果てつつある種族の呪いとは、この古い種族が打たれ呪われてばらばらになり、種族相互間に生ずる不和の中に落ち込んでしまうことである。……二重になっていることそのものが呪いではなく、不和こそが呪いである。不和は盲目的な野生が叛乱を起こすと、その種族を分裂させ、やがてその種族を際限のない個別化に追い込んでしまう。(GA12 45-46、傍点引用者)

二重になっていることそのものが呪いではなく不和こそが呪いであるとハイデガーは言う。刻印によって本質的な在り方から引き剥がされた種族は、種族と種族の間の不和 = 争いを引き起こしていく。なぜなら言葉 = 名前が彼我を分け、われわれを異なる種族として存在させるからである。「われわれ」と「彼ら」は違う。われわれの民族はあの民族とは違う民族であり、現代は過去の世代とは違う世代であり、男と女は違う性である。そう彼らが考えるのはそれぞれの種族の名前 = 言葉が違うからである。世代・男女の性別・部族・氏族・家・民族・階層・国・思想・職業など、無数の刻印は「人類という意味の人間種族」を細分化しこのわれわれに刻み目を付けていく。それらの刻印はわれわれを分割しわれわれを「われわれ」と「彼ら」に分けるものである。そして、その区別ごとに切り離されたわれわれは対立し、「際限ない個別化に追い込」まれていく。もはや既にわれわれは「われわれ」と「彼ら」であり、同時にわれわれであることを忘れている。「種族の二重性」は廃棄され、現象する刻印だけが実在 = 支配する。その支配の下で「本質的な在り方から引き剥がされた」われわれ、「腐敗した種族」であるわれわれは、「恐怖に曝されて」分裂し、

現象する = 「実在」する種族の国境線上で不和を引き起こし続け、われわれ自身を際限のない個別化に追い込んでいくのである。われわれにとって「友」とは同じ刻印の下に結集する「われわれ」であり、別の刻印の下に結集する「彼ら」が「敵」である。この友-敵関係はわれわれにはあまりにも強い事実である。それはわれわれには実在する友-敵なのである。刻印は呪いである。われわれは言葉に聴従するのである。そしてその刻印を、世人であるわれわれは自らに、そして彼の他者に刻み続けるのである。

先の引用に続けてハイデガーは言う。

このように不和となり、粉碎されてしまったこの「崩壊した種族」は、自力を持ってしては正しい種族になってゆく方途を見いだすことができない。こういう種族は次のような種族とのみ正しく共存していく。すなわち、不和から生じてくる二重性を単純な二重構造に特有の従順さへと変えつつさまよいを続ける種族、すなわち「余所者(Fremdlinge)」となり、さらに余所者の後を追うような種族と。(GA12 46)

不和から生じてくる二重性を単純な二重構造に変えるとハイデガーは言う。不和から生じる二重性とは先述の通り「われわれ」と「彼ら」の二重性、つまり「友-敵」の二重性であろう。この二重性を、単純な二重構造へと変えるのは「さまよいを続ける種族、すなわち余所者」であるとされる。余所者はこの二重性を単純な二重構造に変える者であり、またそのことによってさまよう余所者であらざるをえない者である。彼が余所者であらざるを得ないのは、彼が自らの刻み目を失ったからである。「われわれ」ないし「彼ら」に属している者には居場所がある。だが「われわれ」ないし「彼ら」であることを放棄し、かつての居場所を失った者は、永遠に「われわれ」と「彼ら」の余所者として定住地を持たずさまよいつづけなければならない。

では何が彼を余所者にするのか？ それは彼が「単純な二重構造」に従順であることである。彼は「部族、氏族、家という意味のそれぞれの一族」/「人類という意味の人間種族」の二重性、現象する刻み目・現象する刻印としての「われわれ」・「彼ら」/その刻印によって自らの身体に刻み目を付けられたわれわれの二重構造に「従順」なのである。つまり余所者は「われわれ」「彼ら」であると共に常に既にわれわれである。そしてわれわれであるというこの刻印の下で、彼は「われわれ」でも「彼ら」でもありえず、「われわれ」の領土と「彼ら」の領土で覆われた世界の地表に住む場所を持つことができず、さまよう余所者であるのである。

この余所者の種族とのみ、「崩壊した種族」は正しく共存することができる、とハイデガーは言う。なぜならすべてを「われわれ」「彼ら」/友-敵としか見ることができず、どこにおいても友-敵に由来する不和を避けることができないこの崩壊した種族にとって、この余所者の種族のみは、「われわれ」でも「彼ら」でもないもの、友-敵を超えるもの、われわれである可能性として現前するからである。「崩壊した種族」が「正しい種族」になるのはこの友-敵の地平を超えていくこと、現象する「われわれ」「彼ら」の刻印を超え、その現象の奥に蔵されていたわれわれなる一者に還っていくことをおいて他にない。「われわれ」と「彼ら」という腐敗した種族に我を忘れ、結果として崩壊した種族となってしまうわれわれは、余所者の後をついていくことによってその帰還を実現するのである。

#### 4 下降する者

この帰還はいかにして実現するのか。

「われわれ」の領土と「彼ら」の領土は昼の光の中で現象する。われわれを回復する余所者は、したがってこの昼を過ぎて夕暮れの中に行かなければならない。それは刻まれていた領土の境界線が闇に見えなくなり、大地が一つの大地であることを取り戻す夜である。「夜の帳に包まれた星の海——これは大地の上なる天空のことである——における舟旅を続けることによって、魂はこの大地を「冷たい生气」に充ち満ちた天地として、はじめて旅によって経-験する(er-fahren)ことになる。魂は今までの居場所を抜け出し、心の歲月という夕べの薄明かりの蒼さの中へと入り込んでいく」(GA12 45)。

魂はこの世界の現象の地平を抜け出し、すべてのものが蒼く染まる夕べの薄明かりの中へと入り込んでいく。ここで言う「魂」とは余所者のことである。刻印づけられた不和の「領土」が「大地」を蔵し「大地」として回復されるのと同様、余所者は現象する「われわれ」と「彼ら」が蔵する魂なのである。

したがって魂はこの世界のものではない。魂はこの世界に居場所をもたない。魂は現象するすべてのものが区別-刻印され存在にもたらされる以前の「未生」に属し、「未生」を故郷とするものだからである<sup>8</sup>。

トゥラークルの詩を引いてハイデガーは言う。

やがて魚も獣も静かに滑るがごとく消え去る。  
 蒼き魂、暗きさすらいは  
 やがて彼らを親しき者、他の人々より別ちたり。  
 夕されば意味も形象も変わり果つ。

あの余所者についていこうとするさすらい人は、やがて自分が親しい人々から切り離され、この人々もさすらい人にとっては他人であることに気づく。他人——それは朽ち果てた姿の人間を示す刻印のことである。(GA12 45)

夕闇が来れば昼に現象していたものは見えなくなる。余所者の後を辿るとはこの闇の中へさまよい出て行くことである。昼を離れ、あらゆる存在者を存在者たらしめる標が闇に紛れて薄れていく国へとさすらうなかで、われわれは「友」である「われわれ」から別たれていく。「友」だと思われていた者は他人である。「われわれ」というかたちの「友」は、「彼ら」というかたちでの敵が実は敵ではなく刻印づけられた他者たちの結集でしかなかったのと同様、「親しき者」=「友」として区画され刻印されていた「われわれ」なる他者たちでしかない。「夕されば」、もはや「彼ら」という敵は存在しない。そして区画された「友」もまた存在しないのである。世界を区画し自分自身に刻印を刻みわれわれを「われわれ」と「彼ら」に分断して不和を繰り返していた暴力的な昼の世界の上をゆるやかに覆う「夕」の暗さは、初めてわれわれにわれわれを取り戻させ、大地を取り戻させること

になる。

だが大地は失われていたのではない。大地は常に存在していたのである。

忘れていたのはわれわれである。

そのわれわれが余所者の跡を追うのだ。

余所者の跡を追って暗いさすらいの旅路を続けると、余所者の夜の蒼さにまで立ち至ってしまう。さまよいの魂は「蒼き魂」になるのである。

と同時に、この魂はひとり別れて己が道を歩もうとする。どこに向かってか。それは、あの余所者の進むところに向かってである。この余所者は今までのところ詩的に「あの者」(Jener)という指示する語で示されているに過ぎない。あの者とは古い言葉では *ener* と呼び「他の者」(*der andere*)を意味している。「*Enert dem Bach*」とは河の彼岸である。「あの者」、つまり余所者とは、他人に対する他の者、すなわち朽ち果てつつある種族に対する他なる者、ということになる。あの者とは、他人から追いつけられ呼ばれ寄せられたりする者である。余所者とは、世を-離れた者 (*der Abgeschiedene*)なのである。(GA12 46、傍点引用者)

余所者は「あの者」としか呼ばれない。それは彼が名前を持たないからである。彼は名前と刻印の昼-この世の彼岸にいる者、名前と刻印に身を投じた他者たちの他者、自らを他者にしてしまった者たちの他者である。その余所者の跡を追う者は「ひとり別れて」己が道を歩む。彼が別れるのは「われわれ」なる友=自らを他者にする他者たちからである。

では、余所者の本質、すなわち、先達となってさすらいを続けることを身に体して引き受けるような人々は、どこに行けと指示されているのだろうか。また、よそよそしいものの行き先はいったいどこなのか。それは下降に向かってである。この下降とは、蒼さという薄明かりの中に入って消えていくことである。……だがこの自己喪失とは、不安定な境涯に落ち込み、破滅の淵に沈んで消失してしまうことではない。自己を喪失するとは、語義に即して考えると、むしろ、己を解き放ち、ゆっくりと今までの方向から逸れていくことを意味する。(GA12 46-47)

さまよう余所者は余所者であり続ける。彼は夜のみに所属するものではなく、昼と夜に属し、区画された昼の中で、刻み目をつけられた大地のその刻み目の上で、どこにあっても余所者である者としてさまよい続ける。それは「自己」喪失である。だがそこで喪失された自己とは現象する昼の「自己」、「他者である自己」であり、「与えられた自己」=「名前」を失うその自己喪失においてはじめて彼は「己が道」を歩き出す/世界の外に余所者としてのさまよいを始めるのである。

われわれは余所者についていく/余所者がわれわれにそれをさせるのである。だがそれはわれわれがこの世界から切り裂かれていくということである。

## 5 ハイデガーの共同性

私は切り裂かれる苦痛の中でこの私の昼から出て行く。

私は余所者の後を追って行かざるをえないのである。余所者である魂、余所者の魂が私をそうさせるのである。ハイデガーはこの魂 = 精神 (Geist) の本質をこう語る。「精神とは燃え上がるものであり、燃え上がる以上おそらく吹きつけてくるものでもあろう。……焰として燃え上がるとは灼熱の光を発することである。そして、燃え立つものとは、みずから光り、かつ、おのれも輝かされるような自己を忘れること [自己の外に出る] (Ausser-sich) であり、さらには、すべてを喰い尽くし平らげては、白い灰に化して自己を離れる (Ausser-sich) ことである」(GA12 56、傍点引用者) と。これがわれわれを「追いつめて旅路につかせ、先へ先へと進むさすらいが始まる」(GA12 56) ののである。

昼に生きる私にとって、自己を忘れること、すべてを燃やし白い灰にして自己を離れることは苦痛である。昼を離れることは必然的にこの苦痛の中へ行くことに他ならない。それは自己を離れ、「われわれ」を離れ、世界の中での居場所を離れ、あらゆる存在者の岸辺を離れひとり彼岸に行くことである。

だがこの此岸には私が他者である以外のあり方がないのだ。現象するこの昼の中で、私は私の同一性を獲得し、夜のものである魂を忘れ、そして私が私として生きる可能性を失うのである。

ハイデガーは言う。

ところで、魂の生気に充ち満ちているもののみが、生きているものとしての本質的な条件を全うすることができる。こういう能力があるために、生きているものは互いにもたれ合いつつ、調和のとれた響きを発することができるのであり、この相互の依存関係により、すべての生あるものは連携するようになる。こういう効力をもった関連性に則り、生あるものは何もかも有用になる。すなわち、よいことになる。ただし、このよさは苦痛にみちたよさである。

魂の生気を吹き込まれたものはすべて、偉大な魂の基本的な性格に対応して、単に苦痛に充ちつつよきものであるばかりでなく、それと同時に、こういう仕方においてのみ真実なものである。というのは、苦痛は自己のうちに自のれに反するものを持ち、自己分裂を証する性質を身につけているおかげで、生あるものは、どんな形で生を営んでいようと、一緒になって共にあり続けているものを秘匿しつつ露にさせることができる。すなわち、真実に在らせることができるのである。(GA12 58、傍点引用者)

共同性、連携とは何か。

それはわれわれが生存の条件としての共存在であるということではない。他者を気にすること、他者に服従し他者に支配され他者を気遣うその配慮のうちに共同性があるのではない。他者と共にいることのなかに共同性があるのではない。「われわれ」であることが連携なのではない。こうした共同性をハイデガーはすべて否定する。

共同性、連携は「われわれ」を出て行くことにおいて生起する。

「われわれ」が解体してはじめてすべてのわれわれはわれわれであることができる。そ

それは私が私の同一性、私の名前を失うということである。それは私が私を失うということ、余所者の身体を燃え上がらせる焔を私が受け取るということ、余所者の身体を燃え上がらせている焔によって私自身の身体が焼かれるがままにすること、「白い灰」になって大地を取り戻すことである。

そのなかではじめて私は友に会う。

友は焔である。時と空間を超えて彼は魂に焼かれ身体を燃え上がらせている。余所者の身体を燃やし、彼を彼のこの昼から切り裂き、この昼における彼を白い灰に化して彼をさまよう彼岸の者＝「あの者」にした焔、今も彼の身体の形そのままに燃え上がる魂が、私の魂を熱しまた燃え上がらせる。

そして私の魂は自らの焔が私の他者に着火し、その結果彼が蔵していた彼自身の魂の火によって燃え上がるのを同じ苦痛のなかで喜ぶのである。今現前している他者だけではない。あの私の余所者がそうであったように、時間と空間を超えて、私はあらゆる他者の友である。私が彼らの友なのではない。彼らにとって私が時空を超えて友なのである<sup>9</sup>。だとすれば私が他者に向き合うのは、私が他者に向き合うということである。私は他者の区画に向き合うのではない、この区画された他者の蔵している焔に向き合うのである。

焔は時間と空間を越えていく。

私は焔である。

焔において「すべての生あるものは連携するようになる」。

焔は一つなのだ。

それはわれらが一つであるということである。

われわれは他者の他者としてすべての他者と共に生きるのである。

苦痛は自己のうちにおれに反するものを持ち、自己分裂を証する性質を身につけているおかげで、生あるものは、どんな形で生を営んでいようと、一緒になって共にあり続けているものを秘匿しつつ露にさせることができる。すなわち、真実に在らせることができるのである。

呼び声は遠くから遠くへと響く。呼び声に打たれるのは、連れ戻されたいと意志する人なのである。

本文中の略号は以下の通りである。略号の後の数字はページ数を示す。

SZ : Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 16.Aufl, Tübingen, 1927

GA12 : Martin Heidegger, Gesamtausgabe, Bd.12, *Unterwegs zur Sprache*, Pfullingen, 1959

## 注

<sup>1</sup> だから私はひとに承認してもらい、仲間として受け入れてもらえれば安心する。儀礼的・毛づくろいの会話をし、当たり前のことを言い合い（「空談」）、それを聞いてもらって自分がひとに＝世界に「受容された」と「安心」するのである。また、SZ 123を参照。

<sup>2</sup> またハイデガーはこうも言っている。「呼び声の開示傾向のうちには、衝撃という契機が、中断させる揺り起こしという契機がひそんでいる」(SZ 271)。

<sup>3</sup> これは「解放してくれる紐帯」(GA12 251)である。だとすれば本来的顧慮とは「顧慮しない」ことと言っても良いだろう。世人的顧慮とはあくまでも他者を世間的秩序に「縛りつける紐帯」である。

<sup>4</sup> そもそも「人間の本質は言葉の中に基盤を持つ」(GA12 230)。

<sup>5</sup> 「言葉とは：与えるものと言えましょう。それならばいったい何を与えるのでしょうか。詩人の詩的な経験によっても、試行活動の最も古い伝統に則っても、言葉は：「有」(das Sein)を与えるのです」(GA12 182)。

<sup>6</sup> Dingen はもちろん Dinge の動詞形である。

<sup>7</sup> 「言葉は、ものをしてものたらしめる (be-dingen) [すなわち、ものとして非しめること]の条件となる」のであります。我々は言葉のこういう支配の活動を、ものをものとしてあらせること (Be-dingnis) と名づけたいと思います」。(GA12 220)。さらにハイデガーは確認する。「しかし、言葉はものを有らせる根拠ではありません。言葉は、ものをものとして現前させている (anwesen lassen) のです。このさせること (Lassen) を Bedingnis と呼ぶことにしましょう」(GA12 220)。

<sup>8</sup> だがこの「未生」は終末の後に来るものである。「朽ち果てる種族の終焉としての終末は、未生の種族の始まりには先立っているのである」(GA12 53)。

<sup>9</sup> ハイデガーは次のように言う。「近隣関係という近さは、空間時間の関連性に基づいているのではないのです。要するに、近さなるものは、その本質を空間と時間の枠の外部に、空間時間とは独立して持っていることとなります。こんなことを述べるのは、少し急ぎ過ぎかも知れません。今、言ってもよいのは、近隣関係において支配している近さは、空間と時間がパラメーターとされている限りにおいては、空間と時間に基づいているのではない、ということでしょう。しかし、空間と時間は、一般にあるものだとしても、全く別のものなのでしょうか。そして、空間と時間のパラメーターとしての性格が、近隣のもつ近さの妨げとなるというのは、いったい何故なのでしょうか。仮に、空間と時間というパラメーターが近隣のもつ近さの基準となる役割を果たすことができ、その結果、近さを実現する力があるとすれば、その場合は、この空間および時間は、みずからのうちに、近隣ということの際立った特徴となっていること、すなわち、互いに相対し向かいあっていること (das Gegen-einander-über) を含んでいることになるはずですが。……ただ言えることは、この互いに相対し向かいあうことの由来するところが遥か遠くであること、すなわち、大地と天空、神と人が関わり合っているあの遥けきところから来ている、ということです。ゲーテもメーリケも、この「互いに相対し向かい合う」という表現を好んで用いており、人間のみならず、世界の事物についても使っております。こういう、互いに相対し向かい合うことが支配しているわけですが、ここでは、どんなものでも他のものに対し互いに開かれている、しかも、みずからを秘匿することを行いつつ、開かれているわけなのです。そうなると、どんなものでもみずからを他に譲り渡し、また、どんなものでもみずからを他に委ね切り、それでいて、どんなものでも、いつまでもみずからのままであり続けるのです。どんなものでも己れを他に渡していながら、この己れを譲り渡したことを見守り保護し続けますし、しかも、己れをそこで秘匿してしまうのです」(GA12 199)。

## Descent from the world - cooperativeness in Heidegger

Sachiko IGARASHI

This paper criticizes the general interpretation about Heidegger “He is neglecting the existence of the Other”.

Heidegger says that all Dasein are proximally and for the most part “the they”. He states that the they are always “Other” in the sense that they are alienating themselves by identifying to a given segmentation.

However, such occupation can be removed by listening to the “call of conscience” that discourses silently from the inside of Dasein who is living as Other. In addition, such resolute Dasein can cause the authentic solicitude which leaps forth and liberates.

And in the same way, by abandoning “the they”, Dasein can become “stranger” against people who are infinitely divided into “friends - enemies”. Here we can find a cooperativeness that can be said to be “authentic bound” beyond all segmentation.